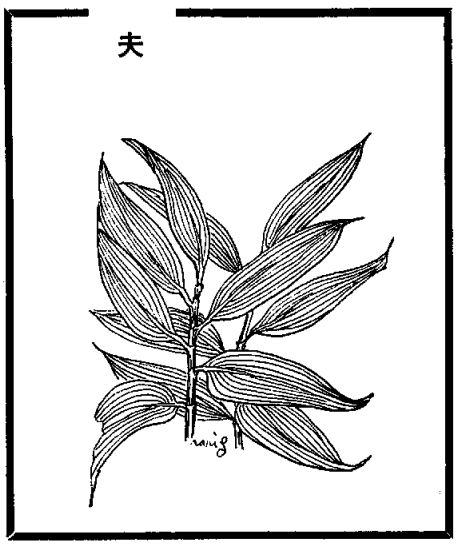
観光開発と裏大雪
および知床の自然

犬飼哲夫



自然保護の問題には、いつもつきもののように観光問題が伴い、両者は相容れないもののような先入感があるのは遺憾なことである。現在のわが国の観光開発は、いままで知られていなかった自然の秘境を世に紹介し、人々がこれをともに楽しむという主旨で行なわれているが、現実には観光は低級な行楽と金儲けのために行なわれ、自然の保護とは反対に破壊の方向に驀進しているといっても過言ではない。

元来、自然保護と観光は平行すべきで、保護された大自然の懐にはいって、人類の美しい面を見出してこそ観光の意義があるのであるが、現在の自然保護運動は、観光のために荒廃していく自然を護るだけで、精いっぱいという情けない状態である。

このような傾向は、一途に民度が低いためときめつけるのは早計である。大衆の自然に対する関心がうすく、近代の世界の自然保護に関する風潮に立ちおくれているためである。これというのもわが国の風土が欧米その他の諸外国に比較して恵まれていて、国民は美しい山水に慣れていて、その価値を認識しないことにもよると考えられる。そのときに当たり戦後の世界の観光ブームが拍車をかけ、素晴らしい発展を見せた近代工業が、観光施設をいとも手軽に片づけていくために、みるみる貴重な自然が破壊され、人工ではとり返しのつかない状態に変貌させて、価値を失っていくのが現状である。

国民大衆の自然に対する理解が徹底しないうちに、観光開発の世界的風潮の波に乗っているから、自然保護はいつも後手に廻り、問題がおこったときはすでにおそく、再現が困難であるというところに自然のデリケートな弱さがある。さりとて人類の祖先の遺産である自然を、一部の特殊な人々が独占秘蔵すべきではない。保護が完全であれば大いに開放し、観光開発によって、ともどもにその価値を味わうべきである。この目的を達するために活発な自然保護運動が必要で、とくにわが国の現状においては緊急を要する問題である。

戦後にブームとなったわが国の観光開発によって、風光明媚な景勝地にケーブルがつき、レストハウスが建ち、各地で問題がおきたが、同時に自然保護の声も盛んになって、両者の調和が考慮される傾向にあることは喜ばしい。その一方、荒廃を免れた自然もまだ豊富にあることは幸いなことである。

かって、日本に滞在していたドイツ人の日本の自然に関する感想文を読んだことがあるが、その中でヨーロッパ人は日本の風土については認識が足りないことを強調していた。日本の人口と国土の広さを数字的に見れば、いかにも狭い土地に人間がひしめき合っている感じを受ける。ところが人口の稠密なのは平地、海岸の都市だけで日本には人跡稀な山々があり、緑濃き密林もあって、ヨーロッパでは自然界から姿を消した野獣（イノシシ、クマ、シカなど）が、まだ多く住んでいる不思議な国であるということを書いていた。

イノシシ、クマが暴れ、山からサルやタヌキが出てくるし、野鳥も多い本州の自然界にくらべたら、開拓ようやく百年の北海道にヒグマが横行するのは無理もないが、他方から見れば北海道の自然の深さと価値は軽視できない。その中でも大雪山国立公園内で、十勝川上流のいわゆる裏大雪の森林地帯、それに新しく国立公園に指定された知床半島の三分の二先端、およびその山岳地帯は、珍らしくも残された原始境で、わが国はもちろん世界の人類にといっても

貴重な存在である。

北海道いたるところで原始の美林を薙ぎ倒した、史上稀な強烈な十五号台風は、奇しくもこの溪谷にはノータッチ。亭々たるエゾマツ、アカエゾマツ、トドマツの大森林。利用する人もない温泉の湧出。尾根から谷々につづくシカ道。ヒグマの縄張り争いの跡など、原始北海道のいわゆる動物の世界を、いま現実にここに見ることができる。これが世界の文明から遠く隔離されたアラスカとかシベリヤの奥地ならともかく近代文明のあらゆる便のある人口六百万の北海道の中にあるのだから、むしろ驚異に価する。

この森林を伐採したとしても、これがわが国の財政にどれだけの貢献ができるだろうか。それよりも、これが子々孫々に与える精神的効果は金額には計上されない偉大なものである。この秘境を護るべく、諸人工施設は最低に留むべきで、山火の防止その他、天災に対する対策など積極的な保護のために投資を惜しまず、貴重な人類の遺産として保存することが望ましい。

現在はユートムラウシ川に沿って林道があり、沼の原に通ずる。また川岸の温泉湧出地に登山小屋があるが、これ以上の施設は今後の自然保護をじゅうぶんに考慮に入れてなすべきで、営林局一局の問題ではないゆえに、局にだけ責任を負わすべきではない。しかし、わが国のほかのこれに匹敵する地の状態から察して、このような人里遠く離れた辺地であっても、保護政策上決して安全とはいえない。経費不足や法規の不備から、徐々に破壊の魔の手が延びているのは寒心に堪えない。

その中で最も警戒を要するのは釣人である。川の釣りに対しては日本ほどルーズな国はなく、全く野放し状態で、入林証さえあれば誰の許可もなくただで釣り放だい。こんな釣人にとって有難い国は世界の文化国の中には一国もない。もともと釣資源の豊富なわが国のことであるから、昔はこれでも支障がなかったが、欧米諸国のようにやがて資源の涸渇の時期が到来することは明らかで、そのときやっと自覚して制限をしても間に合わなくなる。

ユートムラウシの溪谷では、五分ごとに一尾の割合でイワナが釣れ、泊りがけでくる半商買の釣人も、だんだん眼をつけ出したから、危険きわまりないのみか、北海道の溪流の特産のイワナも絶滅する恐れがある。イワナに対してなんの保護も講じられていないからである。

トムラウシ川の中流に建設された岩松ダムには、魚類の上下移動のため設置を要望されている魚梯が全くなく、魚梯の併設が全国的に無視されている現在、これが当然のごとく考えられているのだから、無茶な話である。魚梯設置に相当な経費を要することはうなづけるが、ほかに保護の道を講じないのは無謀といわざるを得ない。急進国のデコボコ文化と非難されてもしかたない。

知床が天下の秘境であることは、各方面でしばしば報告されているからいまさら蛇足をそえるべきではないが、自然保護の立場から愚見を述べたい。知床が世に紹介されるやいなや、ただちに、いわゆる観光業者の着眼するところとなったことは、現状では当然なことである。

陸の孤島といわれた北見側の漁港・ウトロには斜里から立派なハイウェーがつき、それがクマの出没した岩尾別までも延長されて、この両所には立派な温泉旅館が建てられ、ウトロにも数年前には一戸しかなかった旅館のほかに数軒の旅館ができた。そのうえ、夏には観光船がウトロ港と羅臼港の両方から知床岬まで通い、観光者は船からゆっくり知床の断崖絶壁の、天下に稀な絶景を楽しむことができるようになった。

ところがこのようになる以前に、知床岬の突端にレストハウスを作る計画がある観光開発会社から出願され、大センセイションをおこし、地元の人々の強硬な反対が出て、筆者も現地調査をして不許可となったが、危うく知床の真価が失われるところであった。

観光船にしても、地元からの希望もあって、上陸用のボートを積まないことになっているが、岬にレストハウスを作って上陸したり、あるいは観光船のボートで随所に上陸できたとしたら、現在のわが国の一般大衆の常識からして、釣りと等しく天下の無主物、すなわち持ち主のない自然物は、国民全体の財産と考えるより、むしろ誰でも自由に取って私有できるものと思われているから、上陸記念に一人が一石一草をとって来ても、あの狭い地域はたちまち裸地と化することは眼に見えている。

一般大衆が自然保護についてじゅうぶんな認識と責任を持つようになった暁には、どこに上陸しようとなんの恐れもないが残念ながらまだその時期には達していない。恵まれた自然の中で長い慣習にはぐくまれて来た大衆に、自然保護の意義を知ってもらうには、相当な忍耐と努力を要するが、時期の到来するまでは厳格な規制もやむを得ないことである。

（北大・名誉教授）